



Title	中期ハイデガーの真理論：真理の本質を目指す問いと転回
Author(s)	中橋， 誠
Citation	待兼山論叢．哲学篇．1997， 31， p. 13-25
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/5857">https://hdl.handle.net/11094/5857</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 中期ハイデガーの真理論

—— 真理の本質を目指す問いと転回 ——

中 橋 誠

真理とは何か。真理とされている個々のものなら我々は知っている。例えば、地球が丸いということは、現在の我々にとって一つの真理であると考えられる。しかしその様な個々の真理を真理としているもの、つまり真理の本質を我々は知っているといえようか。真理の本質とは何か。この様に問うことで、1930年代のハイデガーは真理の本質を目指す。ハイデガーは、主著である『存在と時間』（1927）においても真理を扱っていた。そこでハイデガーは、「最も根源的な意味における真理」を「現存在（Dasein）が〈開示されていること（Erschlossenheit）〉」（SZ,223）であるとし、人間が現（Da）として「開示されていること」を、即ち人間が現で一あること（Da-sein）を分析しようとした。ハイデガーにおいては、開示されていることという真理と現存在とは切り離せないのである。<sup>(1)</sup> しかし当時のこの分析は、人間としての現存在から現（開示されていることという真理）を分析するに留まっていた。それに対して1930年代のハイデガー（中期ハイデガー）は現を、人間からではなく、現そのものから分析しようとする。こうして現から、真理が何であるかが問われ、真理の本質が目指されることになる。

ところで、真理の本質を目指して問う過程において「転回（Kehre）」の存在をハイデガーは暗示している（GA9,193, Anm., 201）。真理の「本質」を目指す問いにおいては「転回」が必要であるとハイデガーは考えている

様である。真理の本質とは何か、そしてこの問いの遂行の際に生じる転回とはどのようなものなのか、この二点および両者の連関を、真理の本質を目指して問うた中期ハイデガーの思惟に即して、主に論文「真理の本質について」(1943)〈本論文の原形は1930年になされた講演〉を手掛かりとして、明瞭にすることが本稿の課題である。<sup>(2)</sup>

## I

上記の論文においてハイデガーは先ず、伝統的、通俗的な真理を限定しようとする。その一つに、現実的なものを真なるものとする考えが挙げられる。しかし例えば贋金は現実には存在していても真なるものとはされないために、この考えは退けられる。贋金ではなく、本物とされる金はどうの様なものか。それは、現実的で且つその「本質」と一致している金である。現実には存在している金とその「本質」とが一致しているとき、それが真といわれる。しかしこの真理概念をもハイデガーは、真理の本質を目指す問いにおいては考察の対象外とする。それは、物とその「本質」との一致という考えはキリスト教神学に由来し、この考えは純粹に哲学的に思惟する際には避けられるべきであるとハイデガーが考えているからである。キリスト教の創造説では、神が、己の知性の内で予め思い描いたものと一致するように万物を創造したとされている。神により予め思い描かれたものが個々の物を規定するというのである。この、個々の物を規定するものは、神の知性のかわりに世界理性による秩序として受け取られる場合があり、その場合、世界理性が己それ自身に法則を与え、理性的「本質」が生じたとハイデガーは考えている。しかし本質はそもそも、ハイデガーによると、われわれ現存在における世界解釈のあり方の一つであり、現存在における世界解釈から独立してそれ自身で存在するものではないのである (Vgl. GA9,180f., HW,14f.)。

物とその「本質」との一致という考えは、「真理は知性と物とが等しくなることである (Veritas est adaequatio rei et intellectus.)」という伝統的な真理命題を「真理は物が知性と等しくなること」と解したものである、何故なら、この場合の知性はもともと神のそれ(個々の物を規定するもの)を指していたからである、以上のようにハイデガーは考えている。それ故ハイデガーに従うと、伝統的で純粋に哲学的な真理概念としては、真理概念についての伝統的命題を「真理は知性が物と等しくなることである」とする解釈しか残らない (GA9,182)。

ところで、知性と物という全く異なるもの同士の一致は、どの様にして成立しているのか。ハイデガーによるとそれは、知性が己を物へと向ける (richten) ことによってである。知性が己を物へと正しく (richtig) 向けていれば、一致が成立し、真となる。そうでなければ、一致が成立せず、偽となる。「知性と物との一致」という意味での真理は、物への知性の〈方向の〉正しさ (Richtigkeit)」に基づいて成立しているのである (GA9, 182)。

## II

伝統的な真理概念を〈方向の〉正しさに基づくものとしてハイデガーは捉えた。しかし〈方向の〉正しさという意味での真理が根源的なものとして示されたわけではない。〈方向の〉正しさという意味での真理が成立するためには、それに先立ち、物が我々 (知性・言表) に、そして我々が物に対して開かれている必要がある。<sup>(3)</sup> 両者が互いに予め開かれていなければ「向ける (richten)」ということは成り立たない。それゆえ「言表の〈方向の〉正しさとして理解されるなら、真理の本質は自由 (Freiheit) 〈開かれていること〉である」(GA9,186)。我々が開かれていることという意味での自由は、我々が時に応じて取捨選択できるような人間の属性ではない。

我々は開けそのものなのである。そして我々が開かれているということは、開かれていることに我々が関わっているということでもある。しかし、通常われわれは意識的に開かれていることに関わっているわけではないということを見ると、我々は開かれていることに「曝さ」れているといった方が適切であろう。それゆえ「開かれていること」の本質は、我々を「存在しているものの隠蔽が剝がされていること (Entborgenheit) へと曝すこと (Aussetzung)」(GA9,189) である。「曝すこと」を通じて、「開かれていること」が、存在しているものを隠蔽されていないものとして我々に対して存在させる (Sein-lassen)。我々が人間として、存在しているものと関わることが出来るためには、人間としての我々に先立って常に、この「開かれていること」という生起が必要なのである。

以上で見たように、「開かれていること」により我々は、我々に開かれているもの (存在しているもの) に会うことが出来る。「この開かれているもの (dieses Offene) を西洋の思惟はその原初においてタ・アレーテア (τὰ ἀληθῆα)、隠蔽されていないもの (das Unverborgene) として概念的に把握した」(GA9,188) とハイデガーはいう。「言表の〈方向の〉正しさという意味での真理」の本質である「開かれていること」と、ハイデガーの解釈によるギリシア (西洋の思惟の原初) の真理「アレーテイア (ἀλῆθεια)」とは、開かれているもの (隠蔽されていないもの) を真なるものとする点において共通すると考えられている。それ故ハイデガーは、ギリシア語の真理「アレーテイア」を手掛かりとして言表の真理の本質 (開かれていること) を解明しようとする。上の引用箇所からも分かるようにハイデガーは「アレーテイア」を「隠蔽されていないこと (Unverborgenheit)」と否定を用いて訳す。これは、ハイデガーが「アレーテイア (ἀλῆθεια)」の α のもつ「欠如・剝奪 (Privation)」の意味を強調するからである (GA9, 223f.)。

「隠蔽されていないこと」は「隠蔽されていること」の欠如・剝奪である。つまり、「隠蔽されていないこと」(真理)の本質は「隠蔽されていること」(非真理)から思惟されている。真理の本質を目指す、非真理を目指す必要が生じる。これをハイデガーは、「真理はその本質において非一真理である」(HW,40)と表現している。

### III

非真理として第一に挙げられているのは「隠蔽されていること (Verborgenheit)」である。「隠蔽されていること」から隠蔽が剝奪された欠如態として「隠蔽されていないこと (Unverborgenheit)」が生起する。つまり、「隠蔽されていること」という非真理は「隠蔽されていないこと」という真理に先立ち、この真理の基盤として考えられている。それゆえ「隠蔽されていること」は、真理の基盤でありながらもそれ自身は真理であり得ないために、「真理の本質にとって最も独自で本来的な非一真理 (Un-wahrheit)」(GA9,193)であるとされる。

更に、「隠蔽されていること (Verborgenheit)」は「隠蔽すること (Verbergen)」から考えられている。存在しているものは、隠蔽されていないものとしてのみ現出するのであり、隠蔽されているときには存在するとは言われ得ない。この、「隠蔽されているものを全体において、存在しているものを存在しているものとして隠蔽すること」が「隠しごと (Geheimnis)」と名づけられている。「隠しごと」をハイデガーは「真理の本来的な非一本質 (Un-wesen)」(GA9,194)と定義する。

ここで「非一本質」は何を謂うのか。通常の意味での本質をハイデガーは、「存在しているものが何であるか (Wassein)」(GA45,92)や「〈同一の名で表現される個々のもの凡てに〉等しく一妥当する (gleich-gültig) 本質 (エッセンチアの意味での本質性)」(HW,36)と表現する。<sup>(4)</sup> 一方、「最も

本質的なもの」(GA45,38)を本来の本質として考えた場合、この本質は、「等しく妥当するもの」としての本質より「先に一現成している (vorwesend) 本質」(GA9,194)である、言い換えると「く等しく妥当するもの」という意味での本質にとって本質的」(GA9,194)である、つまり本質の本質であるといわれる。ハイデガーは、通常の意味での本質の根底に、通常の意味での本質を可能にしている本来の本質を見て取っている。この本来の本質は、通常の意味での本質の由来であるが故に、もはや通常の意味での本質ではあり得ず、それゆえ「非一本質」と表現されざるを得ない。通常の意味での「非一本質」は、通常の意味での本質の「欠損形態」を指す。しかし本来の本質が「非一本質」と表現されるのは、「普遍的なもの(共通なもの・類)、その可能性(可能化)、その根拠という意味での本質〈通常の意味での本質〉へとまだ下落していない」(GA9,194)からである。通常の意味での本質(何であるか)以前であるから、本来の本質は「何であるか」が述べられず、事象性を持たない。そのため本来の本質(Wesen)は、事象性の由来でありながらも、それ自身は事象性ではあり得ない生起(Geschehen)・現成(Wesen)であると考えられる。この本来の本質(現成)が隠しごとの「非一本質」である。それ故ハイデガーにおいて、「真理の本質にとって最も独自で本来的な非一真理(Un-wahrheit)」(GA9,193)である「隠しごと」は、真理・本質の由来つまり「根源」として、そして真理・本質の「原初(Anfang)」として、それゆえ存在しているものの原初として考えられているといえよう。

しかし我々には通常、隠しごとという原初は隠蔽されている。我々は通常、隠蔽されていないもの(存在しているもの)にのみ関わっている。この、隠しごとが隠蔽され、存在しているものから存在しているものへのみ向かい、存在しているものにのみ囚われていることをハイデガーは「迷い(Irre)」と名づけ、非真理の第二として挙げている(GA9,196)。迷いが向

かう先である「隠蔽されていないもの」は、隠しごとに抗して、隠蔽が剥がされて成立する。そのため迷いは「真理の〈隠しごとという〉原初の本質に対する本質的反本質 (Gegenwesen) である」(GA9,197) とされる。迷いは、上述の〈方向の〉正しさが可能となる次元である。というのは、存在しているものから存在しているものにのみ向かうことが迷いであるため、迷いは、適切に方向が定められれば、認識・判断の〈方向の〉正しさとなるからである。但し、迷いは、それ単独では適切な方向が定められないため、「判断の〈方向が〉正しくないことや認識の虚偽性」(GA9,197) ともなり得る。〈方向の〉正しさは、〈方向が〉正しくないことという一種の隠蔽が剝奪されて成立しているのである。

以上の隠しごとと迷いという二重の非真理の剝奪・欠如として真理が生起する。隠蔽されていることからの剝奪として存在するはずのものを存在しているものとして存在させること、そして、不適切な方向という隠蔽を剝がし、存在しているもののうちで目指されているものへと〈方向〉正しく向かうこと、この様に二重に隠蔽が剝がされることで真理が生起する。だが、隠蔽の剝奪はどの様にして生起するのであろうか。非真理の隠蔽を剝がすことは「闘争 (Kampf)」といわれる (GA9,224)。(5) この「闘争」については「芸術作品の根源」(1935/36) で詳しく述べられている。そこでは世界 (Welt) と大地 (Erde) との闘争といわれる。この世界は、明け開け (Lichtung) であり (HW,41)、己を明け開く (sich lichten) ものもである (HW,29)。この大地は、閉鎖されたもの (das Verschlussene)、己を閉鎖しているもの (Sichverschließendes) (HW,41)、隠すもの (das Bergende) (HW,28) である。ここでは隠蔽する生起だけではなく、隠蔽を剝がす生起も考えられている。隠す大地に抗して世界が明け開くことにより、隠蔽されていないことという意味での真理が生起している。しかし明け開けの生起で隠蔽が消滅するわけではなく、相互の抗争は常に保持さ



れている。言い換えると、隠蔽する生起と明け開く生起とが共に生起し、一つの統一を形成することにより、存在しているものが隠蔽されていないものとしてそのつど我々に現出しているのである。そして隠しごと・迷いと同様、この論文でも隠蔽は二重の仕方で生起する。「隠しごと」に「拒否 (Versagen)」が、「迷い」に「偽装 (Verstellen)」がそれぞれ対応している。<sup>(6)</sup> 両者の関係はここでは明瞭に次のように述べられている。「拒否」は「明け開かれたものの明け開けの原初」である、「しかし同時に隠蔽は、もちろん〈拒否と〉異なる仕方で、明け開かれたものの内部にも存在」し、それは「かの単純な拒否ではない。存在しているものは確かに現出するが己以外のものとして与えられる。この隠蔽が偽装である」(HW,39)。拒否(隠しごと)の剝奪の内でのみ偽装(迷い)が可能となることがここで明確に示されている。そしてこの二重の隠蔽と明け開けとの闘争として真理が生起するのである(HW,47)。この闘争の場つまり明け開けという場が、ハイデガーの表現では「現 (Da)」であり、人間はこの闘争の場である、つまり人間は「現一存在〈現一であること〉 (Da-sein)」である (Vgl.GA9,189, HW,47)。<sup>(7)</sup> 人間としての我々は通常、明け開かれたもの、隠蔽されていないもの(存在しているもの)にのみ態度をとっている。そのとき我々が現一存在であるということは隠蔽されている。現存在は「人間の隠蔽された本質根拠」(GA9,187)なのである。

さて、ハイデガーによると、プラトンにおいても非真理のこの二重性が認められる。そこでは、隠しごとに「レーテー (λήθη)」(GA34,139)が、迷いに「プセウドス (ψεῦδος)」(GA34,134)が対応する。<sup>(8)</sup> プラトンにおいても、二重の非真理から隠蔽を剝奪することで真理が生起すると考えられていたのである。しかしアレーティアは本来、語幹・経験を共有 (GA34, 139) するレーテー(隠しごと)の欠如態として思惟されるべきであったのに、プラトンは、全く異なる経験・語源を持つプセウドス(迷い)の欠

如態として思惟したとハイデガーは主張する (GA34,138)。プラトンのこの考え方が標準的なものとなり、「真理」はプセウドスの欠如態として、つまり「〈方向の〉正しき」としてのみ思惟され、その結果、プセウドスを可能にする根源的な経験、つまりレーテー（隠蔽）・アレータイア（隠蔽されていないこと）の経験が隠蔽されたとハイデガーは考えている (GA9, 232)。

#### IV

真理の本質を目指して問う過程において我々は、「〈方向の〉正しき」としての真理から、「隠蔽されていないこと」としての真理、更にこの真理を発現させる闘争（剝奪）へと至った。この問いの遂行においてハイデガーが暗示していた「転回」とは何か。「真理の本質について」という論文において「転回」という語が使用されている箇所は二箇所ある。

その一つは、第5節「真理の本質」から第6節「隠蔽することとしての非真理」へと節が変わるところである (GA9,193, Anm.)。ここでは、「隠蔽されていないこと」という真理から、「隠蔽されていること」・「隠蔽すること」という非真理への転回が見られる。隠蔽すること（隠しごと）は、通常の意味での真理・本質の原初でありつつも、通常それ自身は隠蔽されていた。それゆえ原初へと至るために我々は、我々の通常のあり方を脱するような「転回」を必要とするのである。(9)

「転回」についての他の言及は、「真理の本質を目指す問いは本質の真理を目指す問いから生じる。……真理の本質を目指す問いは、真理の本質は本質の真理であるという命題において答えを見いだす。……真理の本質を目指す問いに対する解答は、原存在 (Seyn) の生起の内部の転回の言である」 (GA9,201) という箇所である。ここでは、「真理の本質を目指す問い」から「本質の真理を目指す問い」への転回について触れられている。この

転回は何を意味しているのか。「真理の本質を目指す問い」では、本質が「何であるか (Washeit)」・「事象性」と理解され、真理が「認識の性格」とされている (GA9,201)。本質を、「何であるか (Wassein)」・事象性・エッセンチア・「等しく妥当するもの」として捉えるのは、通常の意味での本質の理解であることを、我々はⅢにおいて確認していた。そして通常の意味での真理は「〈方向の〉正しさ」であった。このとき物は、既に隠蔽が剥がされたものであり、物へと知性が向かうことで真理が成立している。これは、それ自身で存在する知性の、それ自身で存在する物に対する関係、つまり「認識の性格」としての「真理」である。それゆえ「真理の本質を目指す問い」における真理・本質は、通常の意味でのそれとして理解されている。一方、「本質の真理を目指す問い」とは何を謂うのか。「本質の真理」をハイデガーは、「本質の本質」、「本質性」、つまり「本質がそのものとして、本来、真理において何であるか」のことであると述べている (GA45,46)。(10) また、「Wesen (本質) の真理を目指す問いはWesenを動詞的に理解する」 (GA9,201) とハイデガーは記している。「本来の本質」・「事象性を持たない生起としての本質」としては、隠しごとの「非一本質」が既に挙げられていた。「非一本質」は、事象性という通常の意味での本質の由来 (原初) であり、それ自身は事象性を持たない現成 (Wesen) であるということを、我々はⅢにおいて捉えていた。ここで Wesen は、事象性を持たず、「動詞的に」捉えられている。そして現成は、通常の意味での本質を可能にするものであり、現成こそが「本来の本質」の名に値するものであった。この本来の本質 (現成) から見ると、通常の意味での本質こそが「非本質的な本質」 (HW,36) といわれる。真理が「隠蔽されていないこと」と解されているのも、動詞としての Wesen (現成) という考え方に対応している。何故なら、「隠蔽されていないこと」と考えたときのみ、隠蔽から隠蔽されていないことへの生起を考えることができ、「明け開けと二重の隠蔽の

闘争としての真理」の現成を思惟することが可能となるからである。(11)つまり、通常の意味での真理を可能にしている、闘争としての真理を思惟するためには、明け開かれているものや明け開けについてのみならず、隠蔽について思惟する必要もあるのである。隠蔽が隠蔽として知られていなければ、明け開かれているものや明け開けについて語ることは不可能なのである。そのため我々は、真理について語るため、隠蔽（非真理）という原初への転回をやはり必要とする。そしてそれは、本質の真理を目指して問うことにより初めて可能となったのである。

## V

「真理の本質を目指す問い」は「本質の真理を目指す問い」とならざるを得ないこと、そしてそれに伴い、真理と本質が各々その原初へと転回せざるを得ないことを我々は確認してきた。真理・本質の由来を目指して問うには、原初へのこの転回が必要なのである。そして原初として我々に与えられていたのは、隠しごとという隠蔽の生起であった。それゆえ原初への転回とは、存在しているものにのみ態度をとる通常の人間のあり方から、「隠蔽の生起の場」つまり「存在しているものやその本質が闘い取られる場」への転回を意味するのである。この闘争の場が、既に見たように現存在 (Dasein) の「現 (Da)」であったことを考慮すると、ここで生じている転回は、人間から「人間の隠蔽された本質根拠 (現存在)」(GA9,187) への転回、言い換えると、(意識から他の意識への転回ではなく) 意識から現への転回なのである。ハイデガーによると、人間を人間としているのは「現で一あること (Da-sein)」である、つまり、人間が現存在を所有するのではなく、「現存在が人間を所有」(GA9,190) しているのである。それゆえ人間の考察に先立って、現存在という「別の根拠」(GA9,202) から思惟する必要があるのである。

以上の考察で、人間から現を目指し、現に至る準備は整えられたと考えられる。しかし我々は、己が現存在であることを認めたとしても、現存在として思惟することが、つまり現から思惟することが許されるのか。現から思惟する方法の可否については別に考察が必要である。

## 注

ハイデガーの著作からの引用・参照箇所は、文中で次の略号の後に頁数を記して示してある。

SZ: *Sein und Zeit*, Tübingen, 16., Aufl., 1993.

HW: *Holzwege*, Frankfurt am Main, 6., durchgesehene Aufl., 1980.

GA9: *Wegmarken*, Gesamtausgabe, Bd.9, Frankfurt am Main, 1976.

GA34: *Vom Wesen der Wahrheit. Zu Platons Höhlengleichnis und Theätet*, Gesamtausgabe, Bd.34, Frankfurt am Main, 1988.

GA45: *Grundfragen der Philosophie. Ausgewählte >Probleme< der >Logik<*, Gesamtausgabe, Bd.45, Frankfurt am Main, 1984.

GA79: *Bremer und Freiburger Vorträge*, Gesamtausgabe, Bd.79, Frankfurt am Main, 1994.

- (1) 「しかし開示されていることは現存在の根本様式であり、この根本様式に依じて現存在は己の現 (Da) である」 (SZ,220)。
- (2) ハイデガーの思惟の発展・変転という意味での転回や、1949年の「原存在 (Seyn) における転回」つまり「原存在の現成の拒絶から原存在の見守りの性起への転回」(GA79,74)を問題とすることも可能だが、本稿では、真理の本質を目指して問うとき必要となる次元への転回のみを扱いたい。
- (3) 開かれていることは、全集45巻では「物と、物と人間の間の領域と、人間自身と、人間に対する人間の、かの四重にして一つの開かれていること (Offenheit)」(GA45,24)とより詳しく表現されている。
- (4) ここで挙げられている「本質」は、Iのそれに等しい。
- (5) 「闘争 (Kampf)」の代わりに「争い (Streit)」と表現される箇所もある。しかし両者は同一の事柄を指していると考えられるため、本稿においては以降、両者を区別しないで用いる。
- (6) 「隠蔽をする拒絶が拒否としては凡ての明け開けに恒常的な由来を初めて付与し、しかし偽装としては凡ての明け開けに迷い (Beirung) のく

だけない鋭さを付与する」(HW,40)という記述に従えば、由来を付与する「拒否」が本質の由来である「隠しごと」に、迷いを付与する「偽装」が「迷い」に対応すると考えられる。

- (7) 『存在と時間』で「現存在」は既に、「それ自身その都度その『現 (Da)』である」(SZ,132)とか、「それ自身が明け開け(Lichtung)である」(SZ, 133)と表現されている。
- (8) レーテーは「隠蔽されていることという根本的意義を持つ」(GA34,142)とされ、プセウドスは「事象が我々に一つの面を向けるが、そのさい背後に潜む他のものを偽装し隠蔽するようにして、事象を曲げること」(GA34,136)、「ロゴスの、言表の〈方向が〉正しくないこと」(GA34,319)とされている。
- (9) 「転回」が「革命 (Revolutionen)」と表現されている箇所もある。革命とは、「通常になってしまったものの方向転換」、「原初への根源的で真正な連関」(GA45,37)である。
- (10) この箇所においてハイデガーは、「真なるものの本質を目指す問いの、本質の真理 (本質性) を目指す問いへの転回」(GA45,46)を挙げている。転回の内容は、この表現から分かるように、いま問題としている全集9巻の201頁と同一のものである。
- (11) 全集45巻において、本来の本質 (現成) は「本質把捉 (Wesenserfassung)」・「本質認識 (Wesenserkenntnis)」(GA45,83)と表現される。そして「本質把捉は、一種の〈本質を『こちらへもたらすこと (Hervorbringung)』〉である」(GA45,83)。「こちらへもたらすこと」とは、「隠蔽されたもの」から「隠蔽されていないこと」(GA45,96)へもたらすことである。

(大学院後期課程学生)